

# 妙典小だより

「自主・自律・共生」

No.21 令和3年 3月号  
市川市立妙典小学校

## 「HAPPINESS」になるための2つの事実

校長 田中 成志

■校庭を見ると、6年生が体育の授業でサッカーをやっています。男子も女子も、サッカー経験者も未経験者も、運動の得意な子も苦手な子も、みんな入り混じってゲームをしています。サッカー経験者の男子が、未経験者の女子に優しいパスを出しています。女子3人がゴール前に立って、男子が蹴るシュートを、体を張って防いでいます。みんなそれぞれですが、みんな楽しそうです。

教室に行くと、教室の前の広い廊下で、1年生がなわとびの練習をしています。「何してるの？」と聞いてみると、「今度、『こんなことができるようになった』って発表するの。そのために練習しているの！」とみんなが必死に説明してくれました。生活科のお勉強だそうです。

理科室で4年生が実験中。「水を熱した時の温度」を調べるために、ビーカーにアルミホイルをかぶせて、アルコールランプで水を熱しています。みんなちょっとおどおどしてます。「ねえ、そろそろ温度、計らなきゃ…」「どうやって？」「アルミホイルに穴開ければ？」「どうやって？」「温度計であげちゃえば？」…ビリッ！…「こんなに大きな穴開けてどうすんの？」…不謹慎ですが、笑ってしまいました。

■子どもがひとりで真剣に勉強している姿もいいですが、こんなふうに、友だちと関わりながらあでもないこうでもない話し合ったり、時にはもめたりしながら何かに取り組んでいる子どもたちの姿を見ると、あらためて「学校の大切さ」を実感することができます。

■米ハーバード大学では、75年の長期にわたり、「人の幸福度に影響を与える要素」について研究されました。この研究は「ハーバーメン研究」と呼ばれ、2009年に研究成果が発表されました。

その結果、研究対象のトップ10%である「幸せを歩んだ人たち」に共通していたのは、「温かな人間関係を築くことができている」でした。なんと人の幸福度や仕事での成功に最も影響を与えるのは、学力やIQ、お金ではなく、「温かな人間関係を築くことができる力」だったのです。

では、「温かな人間関係を築くことができる力」はいつ、どのようにつくのでしょうか。

それはまちがいなく、「子ども時代」です。子どものときに、友達と遊んだり、勉強したり、励ましあったり、時にはけんかをしたりすることで、人は他者との距離を学び、「どうやって関わっていけば他者とうまく付き合っていくことができるのか」を学んでいくのです。「他者との上手な付き合い方」は、本を見ても、教科書を見ても正解は見つけれられません。長い時間をかけて、友だちと関わっていく経験を積んでいくことでしか実感できません。もちろん、大人が教えてあげられるものでもありません。せめて大人がしてあげられるのは、「子どもの人間関係を築く機会を奪わない」ことだけです。

■さらに、慶応義塾大学幸福学教授前野隆司氏が2010年に行った研究では、「友だちは『数』より『多様性が高い』ほうが幸福度に大きな影響を及ぼす」ということがわかりました。つまり、自分と同じタイプの友だちが100人いるよりも、年齢、職業、性別、国籍などが違う「様々なタイプの友だち」を数人持っている人のほうが、幸福になりやすいというのです。子どものときは、多様の範囲に限りがありますが、ひとつの学級にだって様々なタイプの子どもがいます。そんな中で、気が合う友だち、考えが似ている友だち、男子同士、女子同士という、自分と同じようなタイプに限定して友だちを選ぶのではなく、自分とは全く違ったタイプの人と友だちになれるほうが将来の幸福につながるのです。

■子どもが「あの子はイヤ」「あいつは苦手」と言ったら、「どんな人とも友だちになれるかどうか君の人生を決めるんだよ」と言ってあげましょう。間違っても親のほうから「あの子と遊んじゃダメ！」なんて言わないでください。子どもの幸せのために…。